

松井幹夫さんを偲ぶ

とても大切な人であった松井さんを2月に失い、今も毎日、深い悲しみと喪失感の中にいます。

昨年末から私は、コンピュータ上で可変（伸縮自在な）物差しを、数と各種の量（時間や距離など）について作り、その組み合わせを量についての様々な計算に活用するという試みを続けています。これは福岡の板垣賢二さんが命名した「割合測定器」にあたるもので、松井さんがこれに注目し、私は松井さんを通してその意義を理解しました。

その過程で私は松井さんからご病気を知らされ、2月初めにはとうとう亡くなられたのですが、5編ほどのレポートとなった一連の作業の中で私は松井さんを絶えず意識していました。話しを聴いてもらいたかったし、一緒に議論がしたかった。この思いは今も続いています。4月の東数協月例研に提出したレポート二つについては「松井先生に捧げる」と書き添えました。

言うまでもなく松井幹夫先生は数教協の発足当初からの中心メンバーであり、数教協の基礎を築いたお一人です。私は後で外から紛れ込んだ異分子のような存在でしたが、その私が「数教協」の理論について遠慮に欠ける批判を展開するのに対して、松井さんの反応は独特でした。無視や排除でなく、寛大に心を開き、フェアに議論するという態度をとってくれました。当時の二人の「論争」が往復書簡の形で「数学教室」に残っています。

組織が生命を保つには自己革新が必須ですが、松井さんは私の「異論」を自らの見直しの契機として活用するという心の広さ・柔軟さをもつ方でした。だんだん論争相手というより「仲間」という要素が強くなり、数教協の出版物「分数指導の新しい方向をもとめて」を上垣さん、松下さんを含めた4人で出すという結果に到達しました。分数の捉え方についてはさらなる前進が必要です。私は最近、“量の分数”（分母分子が量の形）を強調するレポートを順を追って書いています。これも松井さんに聴いたもらいたかった仕事の一つです。

松井先生は多方面で実践を重ね、書かれた著作物も（奥様のまついのりこさんとの共同のお仕事を含めて）たくさんあり、人々に多くの影響を残しました。普通感覚では、人生を十分に全うしたと言えます。ただ松井先生は気持ちが若く、まだやりたい課題をたくさんもっておられたので、それが中断されることを無念に思われていました。私も残念です。もう少し生きていて欲しかったです。

この20年ほどの間、私は松井先生から多くの恩義を受けました。交わした数々の会話は貴重な記憶となっています。北海道の数教協大会の帰りに釧路湿原で一緒にカヌーを漕ぐことなどに誘っていただいたのも懐かしい思い出です。人はみな死ぬのであり、松井さんは私より一足早くこの世を去ったのです。

小島 順 (数教協・元副委員長, 早稲田大学名誉教授)

2012年 6月15 日